

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0473 ◆◆◆

18/03/07

【 3ヵ月連続の大相場も!?経験則で3月は「一年でもっとも動く」 】

先週終了した2月のドル/円相場は、月間変動幅が4.93円となり、惜しくも1月の変動(5.10円)には及ばなかったが、それでもなかなか大きな値動きをみせた。

そんな2月相場を受けた、足もと3月相場の動静を考えると、「3ヵ月連続の大相場」が期待出来そうだ。これは、経験則的に見て、3月相場が平均すると「一年間で一番大きく動く月」とも言える状況となっていることによる。昨年は年間を通して変動率は10%以下、歴史に残る小変動だったが、今年は一転して「ボラティル」な一年になるのかも知れない。

◎方向性は互角、「期末需給要因から円高有利」とは言えず

当レターの恒例となっている経験則から見た月間見通しで、先に終わった2月相場について、筆者は「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」という両極端になり易い傾向を指摘したうえで、「過去の冬季オリンピック開催年は小動きが多い」と続け、今年も「動かない公算もある」とやや諦めのニュアンスを報じていた。

しかし、終わってみれば月間変動幅は先にも記した4.93円となかなかのモノ。市場参加者のひとりとしては「うれしい誤算」と言ってよいだろう。

1月2月と、幸先の良いスタートを切った2018年の相場だが、果たして足もとの3月相場は如何なる変動が予想されるのか、やはり過去の経験則を参考に以下で考えてみたい。

特徴などを考える前段階として、1990年以降昨年まで28年間の「勝敗」を最初に振り返っておくと、14勝14敗でまったく互角となっていた。先週の当レターでもレポートしたように、「3月決算期末に向けたリパリエーション」など幾つかの需給要因もあり円高有利かと思いきや、意外にも方向性は明確となっていないようだ。

しかし、3月相場には別に大きな特徴があり、それが「方向性を別にして平均すると、年間を通してもっとも値動きのある月」であるということになる。とくに2000年以降、近年にその傾向が強い。

実際、喫緊の事例をひとつだけ挙げると、昨年のドル/円は年間を通して小動きだったことは幾度となくレポートしているが、それでも3月相場は月間変動幅が5.40円、変動率は年間3位を記録するなど、数少ない動意を見せた月だった。さらに、2011年は月間変動幅7.05円、同変動率1位となるなど、2000年以降昨年までの18年間でデータを取ると変動幅1位が4回、2位は3回と年間を通じた大変動の半分近くが3月に集中している。また、過去18年の3月の平均ドル/円変動幅はおよそ5.80円で、これは年間を通じた第1位だ。今年の3月相場も例年通り、大きな変動を期待してよいのかもしれない。

一方、過去の3月を歴史的な面で見ると、興味深い事象が2つ浮かがる。

ひとつは、先にも記したように、日本企業の多くが決算期末にあたるのが影響しているのか、「企業破綻」や「損失公表」といったニュースが多くみられること。そしてもうひとつは、「為替や金融市場に関する、歴史トピックスが少なくない」ことだろう。

後者についてのみ典型事例を示せば、やはり1933年のルーズベルト大統領による「ニューディール政策」発表だろうが、ほかにも1ドル=360円の固定相場制導入を決定した1949年の「ドッジライン」発表、1953年の日本株大暴落(通称「スターリン暴落」)などのほか、もう少し具体的なマーケット寄りの事象として、「NYダウが初めて1万ドル突破(1999年)」、「ドル/円が1995年に記録した戦後最安値を更新(2011年)

注:安値を更新しただけで、大底75.57円示現は同年10月—などがすべて3月中に起こっている。もちろん、こうしたことは毎年確実に起こる、わけではない。しかし、それでも頭の片隅にリスク要因として留めておいて損はない気がしないでもない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

